



名古屋外国語大学・学長

亀山 郁夫

批判的思考力と共感力を備えた グローバル人材の育成を 「世界教養」の理念の下で先導

私の視点 — 課題をこう捉える —

不確実な時代に必要な 人文学的な教養

急速な科学技術の発展により、社会が大きく変わろうとしています。2011年に入学したアメリカの小学生の65%は、今はまだ存在していない職業に就くとの予測があるほか、オズボーンという研究者は、今後10~20年間でアメリカの職業の47%は、ロボットや人工知能で代用されると言っています。また、グローバル化の進展により世界の市場で勝つことが至上価値とされていますが、同時に共生が求められてい

る時代であることも事実です。

このような時代における大学教育の使命は、世界の人々と共生しながらも、自身が生き抜く力を身に付けさせること。そして、世界の人々からリスベクトされる成熟した人間としてのグローバル人材を育てることです。

そのために、全ての大学が教養教育に力を注ぐべきだと考えます。核となるのは人文学的な教養です。科学技術立国を標榜する日本では、理系人材の育成が国家的な使命ではありますが、「英知」を身に付けさせる教養教育が不可欠です。知識が多ければよいとい

うわけではなく、知識を基に、深みのある体験を客観的な言葉で表現できる能力、あるいはそこから派生的に広がっていく新しい「何か」をしっかりと理解できる能力こそが英知です。

共感力を喚起する 英語以外の言語の修得

教養教育によって身に付けるべきは、「クリティカル・シンキング（批判的思考力）」と「エンパシー（共感力）」という、相反する力と両者のバランス感覚です。前者は物事を分節化して批判的に分析する力ですが、後者は

切り分けたものに共通点を見いだす統合的な力です。

エンパシーを喚起するには、語学が極めて有効です。異なる文化を持つ人々に対する共感、主に言語を介して生まれるからです。ただし、英語はもはやそのような言語ではありません。地域性を喪失したグローバル言語であるが故に、言語の持つ固有の文化的な価値観が伴っていないからです。英語は不可欠ですが、さらに別の言語とその文化の理解が必要です。相手の苦しみや悲しみを理解し、共に生きるための共通点を見いだす。世界に対する複眼的なものを見方を身に付けるのです。

極言すれば、英語を含む2つ以上の

外国語と、世界をバランスよく理解できる教養を身に付けた人間こそが、これから育成すべき成熟した日本人像です。2015年度から第8期中央教育審議会の委員になりましたが、そこでもこうした持論を訴えるつもりです。

現実ではなく 将来を見据え決断・実行

大学改革を進めるには、学長がリーダーとしての力を発揮できるガバナンス体制の構築が重要です。その点で、学長と理事会が役割を分担している私立大学のあり方は理想的です。学長が教学に、理事会が経営に責任を持つという構造は、両者の意思疎通を前提に、学長が進める教学改革を理事会

がサポートすることを可能にします。両者がそれぞれ将来を見通しながらビジョンを追求し、受験生のニーズをふまえた改革を進めることができます。

学長がリーダーシップを発揮するうえで大切なのは、あえて言えば「現実を見すぎない」ことだと考えています。大学の教員組織は現状維持の意識が強く、現実を見てしまうと改革は不可能だとすら思えます。そこで、現実を見ず、将来を見る。まずは、がむしゃらに自らが描いたビジョンを追求することです。素早い決断と実行のスピード、成功しなかったらさっと辞めるといった責任の取り方も重要です。リーダーの不退転の決意こそが、改革推進の原動力になります。

名古屋外国語大学の改革

世界に通じる教養を学ぶ 新学科を開設

2015年度、外国語学部の世界教養学科を設置しました。グローバル言語である英語と母語としての日本語に加えて、エリア言語として10の言語、世界の諸地域に関する理解を深め、豊かな教養を身に付けます。世界の多文化性、多言語性に立脚したグローバルな「世界教養」を身に付けることができる学科です。

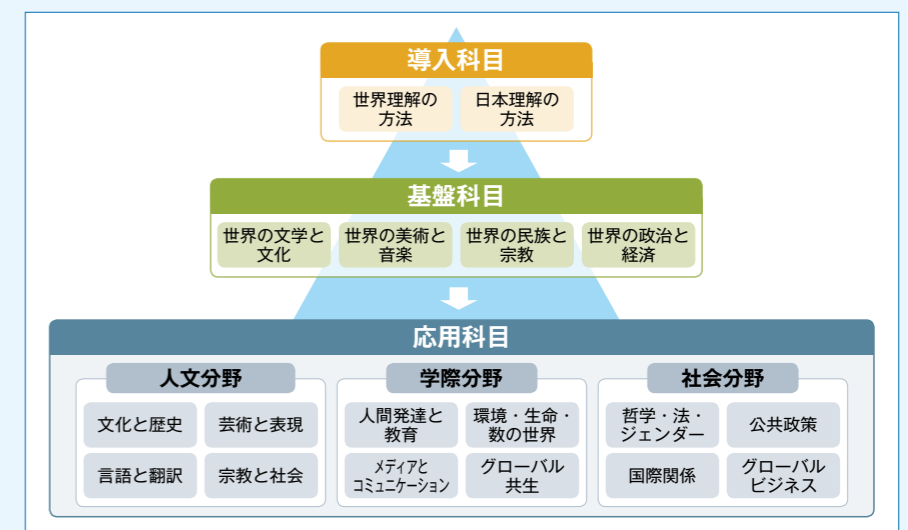
最大の特徴である「世界教養プログラム」（図表）では、世界と日本を理解する導入科目の後、世界における「文学と文化」「美術と音楽」「民族と宗教」「政治と経済」を基盤科目で学びます。続く応用科目は、「人文」「学際」「社会」の3分野それぞれに24テーマを設定。世界に通じる計72テ

マ（科目）の中から自分の関心に応じて、体系的かつ包括的に4年次まで学べます。応用科目は、従来の専門と教養の枠組みでは捉えきれません。72科目全てが学士課程における専門科目で

あり教養科目でもあるという形をとり、興味を持った内容を基に専門ゼミナールを選び、卒業研究に臨みます。

このプログラムは、私立大学が追求すべき21世紀型の外国学教育だと考え

■全学的な展開をめざす「世界教養プログラム」



ています。2017年度からは全学で展開する予定です。各学科のコース科目を減らし、そこに世界教養プログラムの科目を組み込みます。どの学部学科に所属していても、世界教養を身に付けられるようにしたいと考えています。将来的には、同じ法人が設置する名古屋学芸大学と連携したプログラムの展開も視野に入れていきます。

18歳人口減少期をにらみ 特色強化の大改革を構想

2019年度には、ジョイントディグリーを視野に入れたプログラムを実施する計画です。海外の大学と共同でカ

* Power-up Tutorial

リキュラムを開発し、学生は二重の学籍を持ちながら学び、両大学の学長名による学位を取得できる教育課程を構築するもので、文部科学省がスーパーグローバル大学採択校を対象に進めているものと同様の制度です。本学では、それをスーパーアドバンスコースと位置付け、独自に展開します。

さらに、本学の特色である学生3人に対して教員が1人という超少人数の外国語の授業（PUT*）の拡充を図ります。また、留学費用を大学が全額負担する制度を、新たに2か国留学にも対応させます。世界教養プログラムを展開する大学にふさわしい教育体制の

構築を、間断なく進めます。

2018年から日本は再び18歳人口の減少期に突入します。これまで本学は、外国語学部はアカデミック志向型、現代国際学部はキャリア志向型と、異なるタイプの学部構成でしたが、少子化の進行に合わせて、2019年度からさらに大幅な改革を実行する予定です。育成すべき人材像を明確にしたうえで、世界教養学科の学部化を含めた学部再編を検討し、相応の教育プログラムを展開していきます。リーダーシップを発揮して意思と信念を周知したうえで、議論に透明性を持たせ、全学で改革を進める決意です。

トップの横顔に迫る

研究者として

20世紀、特にスターリン時代のソビエト文化研究に力を注ぎました。当時の芸術家は全て国家公務員ですから、スターリンを批判すれば肅正されます。そこで、彼らは作品の中でスターリンや社会主義を讃えながら、同時に批判も込めるという高度な「二枚舌」を使わざるを得ませんでした。優れた芸術家ほど天分をいかんなく発揮し、唾棄すべき権力を作品の中で描くにあたって、賛美が批判を巧妙に隠しています。

文豪への傾倒

ドストエフスキーの研究は50歳を超えてから始めました。その成果は授業を通して学生に還元しています。パワーポイントで150枚もの資料を作成し、映像を交えながらその作品と、

彼の生きた時代について教えてください。

5つの長編小説の翻訳が人生の目標で、これまでに『罪と罰』『悪霊』『カラマーゾフの兄弟』を終え、現在は『白痴』に取り掛かっています。私にとって初めての小説、『新カラマーゾフの兄弟』も執筆しました。

尊敬する人

インターネットイニシアティブ（IIJ）を創業した鈴木幸一氏です。文学部出身でありながらIT分野で起業し、私財をはたいてオペラを中心とする「東京・春・音楽祭」を運営する破格の人物です。信念と情熱、人間的な優しさと包容力、話の面白さ、記憶力を併せ持ち、まるで4つの脳を持っているかのようです。世界教養プログラムで育成したいロールモデルの一人といってよいでしょう。



2001年、東京外国語大学時代にゼミ生たちに囲まれて撮影した記念の一枚。



『碟のロシア』（岩波現代文庫）。スターリン時代の芸術家における「二枚舌」について執筆。大佛次郎賞を受賞。

かめやま・いくお ● 1949年栃木県生まれ。1972年東京外国語大学外国語学部ロシア語学科卒業。東京大学大学院人文科学研究科博士課程単位修得退学。天理大学助教授、同志社大学助教授を経て1990年東京外国語大学助教授。1993年同教授、2007年同学長。2013年から現職。ロシア文化研究者でありロシア文学者。『カラマーゾフの兄弟』の翻訳で毎日出版文化賞特別賞。ロシアからプーシキン・メダルを贈られた。